

本特集について

今回の特集は、研究科の紀要にしては例外的に、アクチュアルな問題に焦点を当てている。直接的には、震災原発事故から三ヶ月にあたる六月一日に一橋大学で行われた震災原発事故をめぐるティーチインの反省会から生まれた案であり、『言語社会』六号の編集長をはじめとして他の協力者の強い後押しのもとで実現した企画である。ただし、特集執筆者が原稿を書いている時点でも、すべてはまだ進行中であったし、また、紀要が刊行される予定の二〇一二年三月末時点でも終わるはずもない。原稿を引き受けていただいた方々、座談会に参加いただいた方々は、普段論文を執筆するといった過程とは全く異なるあり方で言葉を紡がなければならなかったであろう。それは、もしかすると、多かれ少なかれ、研究という形で言葉に携わる多くのひとたちが共有するもどかしさに通ずるものがあるかもしれない。以下では本特集を概観した上で、若干の補足を加えたい。

座談会及び他の四つの論考は、現況下で人文科学の領域からいかなる言葉を紡ぐことが可能か、さらに言えば、現在起きてしまった／いる事態の深奥にいかように迫ることができるかを自ら問いつつ、各々の議論を展開している。まず、座談会についてだが、参加者たちに共通の背景といえ、言語社会研究科に所属している／いたものではない。出身地(国)も年齢も現在身を置く状況もそれぞれ異なる四人が、震災当日から数日、どこでどのような経験をし、当時何を感じ取ったかをまず語り、さらにその後の事態の変化のなかで、何を考えてきたかを語る中で、現在進行形の事態を表現する言葉を探しはじめていることが伺える。現在進行形ということは、現在に至る「過去」を振り返り、現在と分かちがたく続いている「未来」について構想することである。だが、ここでいう過去、現在、未来という区分は、単線的な時間の流れを意味しない。複

数で、時に交差し、速度も異なる時間のことである。

四本の論考は今回の震災を起点に、過去と未来を眼差す内容となっている。池上善彦氏の論文では、ややもすれば共産党の混乱と敗北としか総括されない日本の敗戦直後の多様な動きを、民衆自らのアメリカ主導ではない民主主義を模索する動きであったと喝破し、そこに深く関わっていく芸術家桂川寛の絵画的抵抗の試みを読み取っていく。それは本来ならば戦時中に描かれなければならなかった抵抗であり、また、その抵抗を無に帰そうとする冷戦構造への抵抗という二重の抵抗の意味を担っていくことになるが、結局敗北に至る。しかし、敗北が敗北感において自覚されるのはまずもって抵抗があつてこそであり、また敗北感の自覚なしには抵抗は生まれ得ない。ここには二重の抵抗がある。肝要なのは、二次的な意味において敗北を忘却しようとする自己に抵抗することである。この点において、今回の原発事故で明らかとなった経済成長の敗北を経験した私たち自身が変われるかどうかは、この敗北の自覚の深さにかかっていると結ばれる。

池上論文が敗北と忘却と抵抗の力学を示しているとすれば、山口菜穂子氏は自己検閲における忘却の関係性について論じる。被爆地である長崎の経験を取り上げ、アメリカや日本政府による情報統制もさることながら、被爆者自身が当時の差別的まなざしという二次的な暴力のなかで自らの経験を語る事を否定されていく様子が描写されるが、外圧的な要素だけではなく、そこでは「経験」を語ることへの困難さと聞き手の想像力による接近の困難さというダブルバインドも当然見いだされる。しかし、同時に山口氏は、原爆体験の共有を図るうえである種の自己検閲がなされることに注意を促す。「適切」であるとされる感情抑制的かつ政治性を漂白した語りや文学がこれまで評価、受容されてきたことへの研究者や評論家への責任追求と、周縁に追いやられた「不適切」な語りを聴きとる必要性は、いまここにおいて喚起されるべき提言といえる。

次に西亮太氏の論文は、二〇一一年三月十一日の震災による原発事故を歴史の断絶とみなすか、あるいは連続として捉えるかという世論に対して、これまで「原子力メディア」が担ってきた「進歩」、「成長」、「未来」といったイメージがいかに原子力の危険性を隠蔽してきたかを確認した後、「未来」をどう構想するかにかかわる認識地点に立つ必要を説く。そのために、E・サイード、R・ウィリアムズ、そしてF・ジェイムソンの議論を敷衍しながら、まず「未来」を構想する条件を確認していく。「未来」を構想するとはすなわち「現在」を考えることに他ならない。この「現在」を読み取る作業にジェイムソンの

「内容」と「形式」に関する考察を引き、そのうえで、その中に組み込まれつつも（論文においては第四象限にあたる形式の内容）「現在」を読み取るジェイムソンが指定するところの「われわれ」を、閉域だとして批判するサイドが紹介される。では、閉域に陥らない「われわれ」をどう構想しうるのか。まず、ジェイムソンに欠けている視点は「地理」概念であるとし、ウェールズ出身であるウィリアムズの『田舎と都会』において、「二つ（田舎と都会）の地理的実体を区別するところから」考察をはじめめる姿勢にならう。その際に、『田舎と都会』が「自伝的」であることに注視を促している。この自伝的語りは『追想』しつつその『過去』を『描き直』す行為でもあり、同時に『現在と未来』に向かうものでもある」とされる。そこにおいて、原子力メディアによって吹聴されてきた「われわれ」にとっての「成長」を、「私」の経験として語り直す地点から逆説的に別様の諸関係を結びうる「われわれ」が見いだされる可能性が示唆される。なお、山口氏と西氏の論文はともに、二〇一一年七月一〇日に開催された日本英文学会関東支部ワークショップ「原子力と文学」での発表原稿に加筆、修正を加えたものであることを記しておく。

特集最後を飾る藤野寛氏の論考は、倫理学の問いである「よき生」を構想することはいかにして可能かという問いと、そこでの倫理学者の役割を突きつめた論文である。今回の原発問題を科学の領域に押しやり、専門家のみ理解可能で一般市民は科学者の見解を聞くという姿勢に対して、原発は、科学—倫理—政治という三項関係で考察されるべきだとする。原発と「よき生」の関係については、専門家、素人の区別なく誰もが参加し合意形成されねばならない。倫理学者の役割とはその合意形成のプロセスを調整し推進することであると概括されるが、途方もなくみえるその合意形成のプロセスは、しかし、それを怠ってきたからこそ現在があると思えば、是が非でも必要な手続きであることが了解されよう。原発と「よき生」が共存できるか、その問いへの合意形成はいまここから始まり、粘り強く継続していかなければならないのである。

人文科学という領域からの震災および原発事故への接近がいかなる形で可能であるか、手探りで始まった本特集であったが、ここでは蛇足ながらもひとつだけ補足したい。それは、対談で福島第一原発から最も近い大学に勤務する本多氏が吐露するように、「放射線の問題をほとんど忘却する」ということが自分の中で起こっている」との言葉に象徴される。図らずも特集論文のうち二本は「忘却」を鍵言葉としている。この「忘却」という言葉について考えるとき、そこに二つのベクトルが見いだせ

よう。ひとつは「忘却へと押しやる力」、もうひとつは「忘却を望む力」である。概括すれば外的な力と内的な力となるだろうか。外的な要因に関しては「忘却へと押しやる力」に抗う、という抵抗が生まれえる。しかし、自ら望む忘却はどうだろうか。こと原発に関しては、言葉にはならない人々を不安に陥れる何か「不気味なもの」が常につきまわっているくらいがある。それが人々を駆り立てるし、忘却へと誘っているかのようにもみえる。忘却にまつわる双方の力の抗争に注意深くあることもまた、求められている。

災害と原発

その意味で、原子力発電所の存在に比べ、津波および震災が東北を襲ったという事態は最も忘却されやすい事態であるといえる。津波災害の直接の打撃を被った東北の歴史の地層／断層とつきあわせつつ、原子力への問いを問い直すということは、単に問題を複雑化することにとどまらない。双方を共に思考するとは、年間被爆量二〇ミリシーベルトを上限として定めた文科省のありようと沖縄戦の記憶を接続しつつ、新城郁夫が述べるところの、「死への封じ込めを国が既に想定内のこととして暗に命じるといふ事態」への相互扶助的な抗いとしてあるのではないか。それは、とりもなおさず原発・原子力を巡る議論及び情報の交錯がドメスティックな範疇へ困り込まれる事態への批判に繋がる回路を開示することにほかならない。そこには、例えば以下のような、相反する事例を呼び込むことができるだろう。

まず、既に閑却されて久しい事実の一つに、元駐日米総領事で米國務省日本部長（当時）であったケヴィン・メアの更迭がある。アメリカン大学学生に向けての講演の中で、メアは、沖縄県民を「ゆすりの名人」と発言したことが、参加者による記録により明らかにされ、三月一〇日に更迭された。³³しかし、後に普天間飛行場の海兵隊が「トモダチ」作戦と称して被災地の救援にあたった際にその指揮をとったのもまたメアであった。作戦成功に「感謝」した日本政府は毎年約一八八〇億円の思いやり予算を五年間追加することを決める。一九五一年以来、潜在主権という名のもとに裁判権を放棄することを強いられてきた沖縄にあって、原発事故という災害が「日米同盟」強化のまたとない契機となったのである。その強化は、八重山におい

て「つくる会」系の教科書が、文科省およびかつて小泉政権下で教育再生委員を務めた元「ヤンキー先生」として知られる自民党議員の後押しによって、石垣市及び与那国町において採択されようとする動き、さらに、防衛省による与那国島への自衛隊配備を進める動きによって加速されつつある^④。

このように「災害」が、戦時の、あるいは戦時を予期させる事態を呼び寄せてしまう事態には十分な批判が尽くされねばならないし、そのような流れに抗う記憶が召還されるべきだろう。例えば、昭和三陸津波地震（一九三三年三月三日）の際に、「救援の輪は全国都道府県から、果ては、海外にまで広がり、日本が侵略中の相手国、中華民国からまで義援金が寄せられた」^⑤。これらは、原発が中央から離れた地方に立地させられてきた歴史と相互に関連づけてさらに考察されるべき地層／断層のごく一部にすぎないが、今後、このような事態への批判的検討は、様々な場所で積み重ねられるべきだろう。

隘路を回路へ

あの日以降ですべてが変わってしまったという人も、変わらずに日常を続けようとする人も、どこかに言葉にならない思いがあるはずである。それぞれが、どこかで止まってしまった時間を秘めたままにいるかもしれない。何も始める気さえ起こらない、あるいは何もできない人だっているだろう。しかし、その未だ明瞭な形をとらない思いは、それぞれの固有性を有し、現在も継続し、なおかつ開かれたままである諸々の問いに接続されうる回路であるかもしれないのだ。二〇一二年に、あえて震災及び原発事故の特集を実現へと促したのは、未だ事態が進行しつつある中、各々が各々のやり方で現実を問うことへ、とりあえずの肯定の意を表明したいという渴望である。

市民による放射性物質の自主的な計測、二〇一一年年四月一二日の高円寺、同年一月のエジプトのタハリール広場、同年九月のウォール・ストリート占拠を挙げるまでもなく、各自各様の方法で現実を問う行動が続いている。既に、震災及び原発に関連する雑誌や書籍が大量に出版される中、あえて研究科の紀要という形で世に問うことは、それは、自らの研究領域に軸足を置きつつも、より切迫した現実に対して既に様々な場所で様々な形で行われつつある異議申し立てへと連なろうとする試

みであると言い換えることもできる。それはまた、歴史上幾度となく行われてきた、理論と実践を接続する試みのひとつ、乃至は、人々の行動に突き動かされてきた様々な思考の一形態であるといえるだろう。

言葉を発明しなおす

座談会参加者の一人である山内明美さんが図らずも述べているように、「過去のことを研究する訓練はさんざん受けてきたけれども、未来のことを研究する力は持ち合わせてない」という言葉は、すぐさま、私を含めた、とりわけ人文系の研究者に跳ね返ってくる。別の言い方をすれば、先行研究がない中で未来を構想する批判的な言葉を発明し直さなければならぬ。国境をまたいで活動する市場経済原理主義の「協力者たち」が、災害に乗じて「復興」から利益を得ようとする試みを少しでも遅らせるために⁶⁰。ただし、そのような発明の企図は、詩人の、文学者の、哲学者の、歴史家の、科学者の言葉に、さらに言えば、未だ言葉になっていない言葉に、言葉になることなく埋もれてしまった言葉たちに対して向き合うことと不可分である。おそらくこの先十年、二十年あるいは、それ以上にわたって、震災「復興」及び原発事故の影響は間違いなく続く。その時々、言葉を紡ぐことを、記録／記憶することを、語り合うことを、批判への意志を継続することを後押ししてくれるのは、固有の危機において刻まれてきた言葉たちから、そして、刻まれなかったかもしれない言葉を聞く方法を、学ぶことである。原稿執筆を引き受けてくださった方々には改めて敬意を表したい。また、この特集が生まれる直接のきっかけとなった「たまウオーク日国立」に参加された方々及び企画立案に関わってこられた方々へ感謝の意を示したい。この特集を通して、読者の方々の中に一抹の問いの始まりが生まれることを願う。

- (1) 新城郁夫「沖繩の傷という回路」『世界』二二一二月号 no.824、二〇一一年、七八頁。
- (2) レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』は、「相互扶助」の理念的始祖としてクロボトキンの名を挙げ、ギユスターヴ・ルボンヤトマス・ホップスに代表される民衆蔑視と対置させている(高月園子訳、亜紀書房、二〇一一年)。二〇一一年三月一日以後の相互扶助に対するバックラッシュを取り上げた最も早い記事の一つとして、徳田匡『相互扶助』が弾圧され、「反(脱)原発運動」が嫌悪される[1]『Gas barcas, vol. 1, pp.9-12』がある。
- (3) 「差別発言 メア更迭 米、反発沈静化を図る」『沖繩タイムス』、二〇一一年三月一〇日、「メア日本部長を更迭 次官補外相に謝罪」、『琉球新報』二〇一一年三月一日。
- (4) この経緯、および、家永裁判以降の教科書問題の文脈における位置づけは、新城郁夫「教科書問題を問題化するために」『けし風』七二号、二〇一一年九月)に詳しい。
- (5) 山下文男『津波でんでんこ——近代日本の津波史』、新日本出版社、二〇〇八年、九八頁。この本を知る直接のきっかけとなったのは、東琢磨氏の論考「ヒロシマ4と命でんでんこのあいだで」(『現代思想』「東日本大震災——危機を生きる思想」二〇一一年五月号、一九二—二〇一頁)による。記して感謝したい。
- (6) ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』(幾島幸子、村上由見子訳、岩波書店、二〇一一年)は、同様の事態を、チリを初めとする中南米諸国、スマトラ津波後のタイやスリランカ、オスロ合意後のパレスチナ、イラク、アフガニスタン、ハリケーン・カトリーナの被災地ニューオーリンズなど膨大な例を挙げ例証している。